2023
秀作

第56回「おかねの作文」コンクール

一本のジュースから

徳島県・徳島文理中学校　３年　津島　優生

今日、自販機でジュースを買った。自販機の前まで行って、目当ての飲み物が残っているか確認する。カバンから財布を取り出す。財布から小銭を取り出す。小銭を投入口に入れる。選択ボタンを押して、飲み物が落ちてくる。ただ飲み物を買うだけだが、文字に起こすとこれだけの工程がある。

いざ飲み物のプルタブを開けて、口に入れようとしたとき、少しの罪悪感を覚えた。「夕飯前のこの時間にわざわざ無駄遣いをしてしまった。」しかし、今日は勉強に始まり、文化祭の準備、部活とよく働いた、だからこれは自分へのご褒美なのだ、と誰に言うでもなく心の中で弁明する。ここまで言い訳してから、ふと考えた。なぜ自分は罪悪感を覚えたのか。一つの考えに至った。確かに無駄遣いをしたことも一因ではある、だがそれ以上に、飲み物を買うために行ったいくつかの工程、それのひとつひとつが、私の選択の是非を問うてきたように感じたのだ。何度も確認の動作を行った。本当にここで140円を使ってしまっていいのか、家に帰れば茶の１本や２本あるのではないか、と。このことが、たった140円の買い物にここまでの罪悪感を生み出したのではないか。私はこの小さな発見に納得するとともに、この「罪悪感」は無くしてはならない、極めて重要な感性であるように感じた。

しかし、最近の自分を振り返ってみると、この感性が失われつつあったのではないかと感じた。特に、キャッシュレス決済を利用するようになってからその傾向が強まったように感じる。

近年のキャッシュレス化の波に押され、私も数か月前から決済アプリを利用するようにした。実際に使用するようになって、何よりその速さに驚いた。アプリを開いて、バーコードを読み取って、もう支払い完了。数秒ですべてが完結する。とてつもなく便利だ。しかし、その速さ、便利さを享受するあまり、「金を使うこと」に対しての重要さが薄れ、自分に対して選択を問い直すことをお

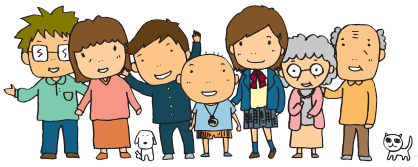
© 金融広報中央委員会2023

ろそかにしてしまっていたのではないかと思う。支払いまでの過程がほとんど省略されることで、便利になると同時に、確認の動作も省略されてしまう。そのような状況下では、罪悪感を覚える暇もなく買い物を完了してしまうのももはや必然といえる。

そのうえ、人の感覚的にも、現金払いかキャッシュレス払いかの違いは大きいように感じる。現金払いはその名のごとく「金」そのものを払う。だから財布の口を開けたときにちゃりちゃりと小銭のぶつかる音が聞こえる。小銭をつかんだときに金属の質感を感じる。紙幣の印刷の凹凸を指先から感じる。貫禄あふれる野口英世や福沢諭吉の肖像画を見ると、価値の高さを感じる。聴覚、触覚、視覚で、「金」の重大さ、価値の高さを再確認する。これは、幼少期から培われた、もはや本能的ともいえる感覚ではないだろうか。

しかし、キャッシュレス払いで触覚的に感じるのはスマホの画面の滑りの良さくらいだ。聞こえるのはおなじみの決済完了音だけだし、画面に見えるのは「残高」という文字と数桁の無機質な数字しかない。これでは幼少期からの感性を発揮しようにもできるはずがない。おそらく、本能的には未だ「金を使って物を買っている」という重大性をこの行動から見いだすことができないのだろう。金を使う実感を伴わずに金を使っていると言い換えられるかもしれない。非常に危険な状態であるのは言うまでもないだろう。

キャッシュレス化が推し進められてきた昨今、マスメディアなどではキャッシュレス決済の便利さ、手軽さの面がより強く発信されてきたように感じる。そのなかで、私のように周りに流されるようにしてキャッシュレス決済を始めた人が多くいるだろう。そして、その手軽さを享受する。しかし、キャッシュレス決済が内包する危険性を忘れてはならないと思う。特に無意識下においては。あくまでそれは道具に過ぎない。私たちはアプリを使って「金を使って」いる。金を使うことの重大性は何ら変わっていない。無意識下にその感覚が薄れてしまったとき、私たちは知らず知らずのうちに金を浪費してしまうだろう。



© 金融広報中央委員会2023